



# 安積の歴史シリーズI



## 第13回 近世 しんばん 親藩・ふだいはん 譜代藩・とざまはん 外様藩の配置

### 柳田 和久 (やなぎだ かずひさ)

郡山市文化財保護審議会  
委員



#### 会津藩の成立（親藩）

寛永20年（1643）、加藤明成<sup>あきなり</sup>が会津領を返上すると、徳川幕府は会津に保科正之<sup>まさゆき</sup>を入れた。

正之は慶長16年（1611）5月7日に2代将軍徳川秀忠<sup>ひでただ</sup>の4男として生まれ、名を幸松<sup>こうまつ</sup>と付けられ竹村助兵衛の元で育てられた。母は小田原北条氏の旧臣神尾伊予<sup>いよ</sup>の娘お静<sup>しず</sup>で、助兵衛はお静の義兄である。<sup>(1)</sup>

元和3年（1617）に秀忠の密命により、幸松は信州高遠藩<sup>たかとうはん</sup>（長野県伊那市）2万5千石の城主保科正光<sup>まさみつ</sup>の養子となり、寛永8年（1631）に正光が死去すると、幸松が跡を継ぎ高遠藩主となった。<sup>(1)</sup> 名を正之と改め肥後守に任じられた。

寛永13年（1636）に出羽国山形藩20万石の城主となり、同20年（1643）7月に山形より会津へ移され23万石の城主となった。<sup>(1)</sup> 会津藩は徳川の親藩として成立し、以後正之の子孫が代々城主となり明治維新まで続いた。

#### 白河藩の成立（譜代藩）

寛永20年7月、榊原忠次<sup>ただつぐ</sup>が上野国（群馬県）館

林より白河に移され、白河藩14万石の城主となった。忠次の祖父榊原康政<sup>やすまさ</sup>は、本多忠勝<sup>ただかつ</sup>・酒井忠次<sup>つぐ</sup>・井伊直政<sup>なおまさ</sup>と共に徳川四天王と呼ばれ、徳川の門閥譜代大名である。譜代大名とは関ヶ原合戦以前から徳川家康の家臣として仕えていた者が、藩主となった大名のことである。

榊原康政は、永禄3年（1560）から家康に仕え、家康の江戸城転封にともなって館林城へ移された。忠次の白河転封は、館林に移って以来2度目の転封である。<sup>(2)</sup>

白河は関東と奥羽の境に位置しており要害の地である。<sup>(3)</sup> 門閥譜代大名である榊原忠次の移封は、会津藩を支えながら、奥羽を押さえるため配置されたのである。榊原氏以後も白河には譜代大名が配置されている。

#### 二本松藩の成立（外様藩）

寛永20年7月、丹羽光重<sup>みつしげ</sup>が白河より二本松へ移された。二本松藩領は安積郡と安達郡の110ヶ村で、白河と同様に10万石である。それまで二本松は会津の支城であったが、丹羽氏の入封により藩とし

て成立した。外様藩である。丹羽氏は関ヶ原の合戦後に徳川家康に仕え、以後代々丹羽氏が二本松藩主として明治維新まで続いた。

丹羽長重の嫡男光重が二本松に移封されたことについて、「二本松へ移封後も、伊達・上杉・佐竹の3家を始め、奥筋の面々が二本松城下通行を見届け城を発すること白川の如し」とあり、<sup>(4)</sup> 奥羽の諸大名の監視にあたったのである。

### 守山藩と長沼藩の成立

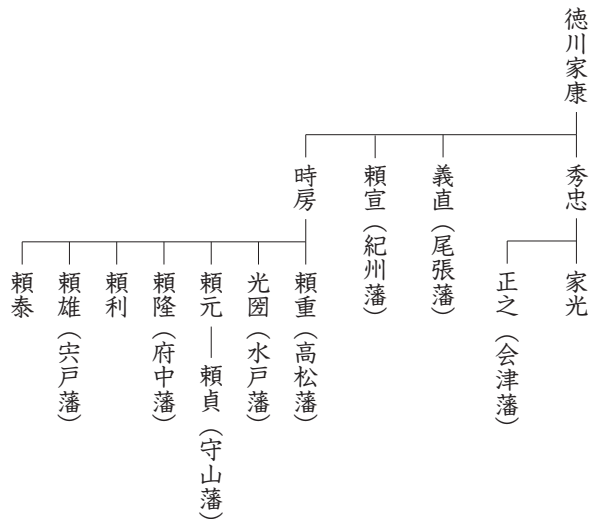
徳川の御三家水戸藩の御連枝に、讃岐高松藩・陸奥守山藩・常陸府中藩・常陸宍戸藩の4藩がある。御連枝とは本家の水戸藩を支え補佐するために置かれた藩である。

高松藩は、水戸の初代藩主頼房の嫡子頼重が、寛永19年に常陸国下館より讃岐国高松（香川県高松市）に移された。頼重は水戸藩主徳川光圀の兄である。<sup>(5)</sup> 宍戸藩は、天和2年（1682）に頼房の6男頼男が、水戸藩より1万石を分領されて立藩した藩である。<sup>(6)</sup> 宍戸（茨城県友部町）に陣屋を置き、茨城郡27ヶ村を支配した。

守山藩・府中藩は、元禄13年（1700）に、5代将軍綱吉から2万石ずつを与えられて立藩した。守山藩には頼房の4男頼元の子頼貞が、府中藩には頼房の5男頼隆が藩主に取り立てられた。<sup>(7)</sup>

頼元は、寛文元年（1661）に本家水戸藩より常陸国額田郡のうちに2万石を分領されていたが、頼貞が将軍綱吉より陸奥国田村郡と常陸国行方郡・鹿島郡・茨城郡のうちに2万石を与えられたため、分領を水戸本家に返した。<sup>(8)</sup> 田村郡守山と額田郡松川に陣屋を置いたので、守山藩（守山領）、松川藩（松川領）と称した。守山藩は阿武隈川の東岸沿の31ヶ村を領した。<sup>(9)</sup>

頼隆は、寛文元年に本家水戸藩より常陸国久慈郡のうちに2万石を分領されていたが、将軍綱吉より陸奥国岩瀬郡と常陸国新治郡・茨城郡・行方郡のうちにおいて2万石を与えられたため、分領を水戸本家に返した。府中（茨城県石岡市）と長沼（福島県須賀川市）に陣屋を置いた。府中藩と称したが、長沼領が本領であるため長沼藩、府中領とも呼んでいる。<sup>(10)</sup> 長沼陣屋は旧幕府領の陣屋



第1図 徳川家略系譜

を用いた。長沼領は岩瀬郡の18ヶ村で会津藩領と接している。<sup>(10)</sup>

頼重が讃岐高松に移封されたことについて、「中国・四国の諸大名の監視役を命じられていたともいう」とある。<sup>(11)</sup> 同様に、守山藩・長沼藩の立藩も、奥羽の諸大名を監視するためで、警備体制の強化を計ったと考えられる。

### 二本松藩主 丹羽氏

丹羽氏の始祖は長秀とされている。長秀は、天文4年（1536）に長政の嫡男として尾張国児玉村（愛知県名古屋市）に生まれ、天文19年（1550）に16歳で織田信長に仕えた。永禄3年（1560）には桶狭間の合戦に参戦し、翌4年には犬山城攻め、永禄7年（1564）には稲葉山城攻めに参戦し、元亀元年（1570）の姉川の合戦には、浅井長政・朝倉義景を破り、近江国佐和山（滋賀県彦根市）5万石の城主となった。<sup>(12)</sup> 天正3年（1575）には長篠の合戦に参戦し、その後も数々の合戦で戦功をあげ、信長が天下統一の道を歩むと、自らも戦国大名への一途を辿った。

永禄5年（1562）に長秀は、信長の異母兄信広の娘を娶って織田家の一族に加わり、織田取立大名の筆頭として、柴田勝家とならび称される宿老的存在となった。豊臣秀吉は木下藤吉郎と称していたが、従五位下築前守に任じられ、羽柴筑前守

秀吉と名乗った。丹羽長秀と柴田勝家の武勇にあやかるため、丹羽と柴田の一文字ずつを付したとされている。<sup>12)</sup>

天正10年（1582）、本能寺の変において織田信長が明智光秀の奇襲により自害した。この時、信長の家臣の中で本能寺の近くにいたのが長秀であった。長秀は四国攻めのため織田信澄とともに大坂城に滞在していた。光秀逆心の報を聞くと、大阪城を信澄に守らせ、光秀を討つべく河内国守口（大阪府守口市）まで進軍した。しかし、信澄は光秀の娘婿であり、大坂の国人や伊丹の一揆等と計らい、背後から長秀を攻撃する計画であることを察知し、急ぎ軍勢を引き返し、大坂城を攻め信澄を自害させた。大坂城を攻めているうち中国の毛利氏と対峙していた秀吉が、2万の大軍を率いて尼崎に到着した。そのため、長秀は秀吉軍と合流して山崎において光秀を討ったのである。<sup>12)</sup>

天正11年（1583）、長秀は秀吉とともに、賤ヶ岳の合戦に柴田勝家を破ると、秀吉は「当家ノ厚恩父母ノ如シ、子孫マテ是ヲ忘ルヘカラス」と謹謝し、長秀は越前（福井県）・若狭（福井県）・加賀（石川県）の120万石を領する大名となった。天正12年に、秀吉と家康は小牧・長久手で対峙すると、長秀は秀吉方として参戦した。和陸後、秀吉は長秀に上洛を要請したが、病気を理由に重臣の村上義明を登らせ、翌年春に上洛したが、天正14年4月に51歳で病死した。<sup>12)</sup>

### 丹羽氏の所領没収

長秀の跡を継いだ嫡男長重は、天正14年（1586）佐々成政征伐のおり、家臣が軍令を犯した理由で、越前国の領地は没収となり、翌15年の九州島津征伐の時にも軍法に背いたとして若狭国が没収され、加賀国松任（石川県白山市）4万石に減封となった。<sup>12)</sup>

天正18年（1590）、長重は秀吉方として小田原の合戦に参戦し、文禄元年（1592）には朝鮮出兵の本陣である肥前国名護屋城（佐賀県唐津市）の大手南に3階の鐘楼を築造した。同3年に伏見城（京都市）の築城に際し千貫櫓を築き、文禄4年には8万石が加えられ、加賀國小松12万石余の城

主となった。<sup>12)</sup>

慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦には、豊臣方として出陣し、前田利長と交戦したため小松城12万石は没収され、長重は柴野大徳寺（京都市）に蟄居し鳥羽へ幽居となった。<sup>12)</sup>

### 丹羽氏の大名家取立

長重は、大坂冬の陣・夏の陣を前に再び大名に取り立てられた。徳川秀忠等の斡旋により江戸高輪（東京都港区）に大名格の屋敷を与えられ、慶長8年（1603）に常陸国古渡（茨城県桜川村）において1万石の大名に取り立てられた。長重は、大坂冬の陣、夏の陣には徳川方として参戦した。<sup>11)</sup>

元和5年（1619）に常陸国江戸崎（茨城県稲敷市）において1万石が加増され、元和8年（1622）に陸奥国棚倉藩5万石の城主となった。寛永元年（1624）に棚倉城の築城に取り掛かり、約2年の月日を費やして完成させた。<sup>12)</sup>

寛永4年（1627）に棚倉から白河に転封が命じられ、白河10万石の城主となった。白河は関東と奥羽との境に位置し、奥羽の押さえの要害の地であった。幕府は奥羽の警衛を命じたのである。そのため、白河城（小峰城）の築城を命じ、長重自ら築城の場所を見て廻った。櫓数、隄塁（堀と土塁）、石垣等の図面を作成し、幕府より2万両を借り、7年の歳月を費やして築城した。<sup>12)</sup>

長重の白河移封は、奥羽の押さえのためであった。寛永20年に二本松に移っても引き続き奥羽の押さえとしての役割を担ったのである。

### 註

- 1) 中村彰彦『保科正之』
- 2) 『白河市史』2
- 3) 『白河市史』2、『寛政重修諸家譜』2-265
- 4) 『二本松市史』1、5
- 5) 吉川弘文館『国史大辞典』9
- 6) 吉川弘文館『国史大辞典』6
- 7) 吉川弘文館『国史大辞典』13・12
- 8) 吉川弘文館『国史大辞典』13
- 9) 『旧高田領取調帳』東北編
- 10) 『長沼町史』3
- 11) 註5
- 12) 註4